

推進校の実践報告

静岡県榛原郡吉田町立自彊小学校

1 重点課題への取組

(1) 研修テーマへの取組

昨年度までの取組から、子どもは言葉にこだわって書かれている内容を読み取ったり自分の考えをもったりするようになってきたという成果は得られたものの、自分の考えを聞いている人に分かりやすく伝えたり、話している内容を聞き取り自分の考えと絡めながら練り合ったりするという点については課題が残された。「解釈（読む力・聞く力）」→「熟考・評価（考える力）」→「表現（書く力・話す力）」という学びのプロセスの中で読解力を身に付けていくという押さえからも、「読み取ったことや聴き取ったことを表現する」ことは重要であると考えた。

そこで、平成22年度は、研修テーマ「進んで学ぶ子の育成」のもとに、サブテーマを「読解力を高めるための授業の創造」とし、自分の考えを聞いている人に分かりやすく伝えるためには、根拠をもった自分なりの解釈ができないといけないのではないかと考え、子どもの「話を聴き取る力」や「自力で文章を読む力」のさらなる向上を図ってきた。

そのための手立てとして

- ・ 根拠をもった自分なりの解釈を生みだすための「発問の工夫」
- ・ 読み取ったり聴き取ったりする力を身につけさせるための「場の工夫」

の2つを柱として取り組んだ。

ア 主として手だて「発問の工夫」に関する実践

(ア) 3年「だいじなことを見つけながら読もう」（説明文「めだか」）

単元目標である「文章の組み立てに気をつけながら読んだり、目的に応じて要点を押さえて読んだりすることを通して、説明文を読み取る力を高める」を身に付けさせるために、「文章の細かい点にこだわって読み、めだかの『特別な仕組み』を考える子」を進んで学ぶ子と押さえ、子どもの思考の流れを予想し、複数の補助発問を用意して目標に迫ろうと考えた。（発問の工夫）

本単元では、特に「段落相互の関係」を考えさせ、話題が提示されている段落や問いと答えの書いてある段落などの文章構成を理解させたいと考えた。しかし、3年生になって初めての説明文であるということから、「筆者の一番言いたいことは何だろう。」「理由が分かるところに線を引いて考えよう。」「順序を表す言葉はどこに書いてあるのだろうか。」などのスモールステップを踏んだ補助発問を用意し、指示語や接続語、繰り返し表現、強調した表現など、細かな点に着目できるようにした。

指示語や接続語を意識させた授業を続けることで、子どもは自分の考えの根拠を探すポイントとして、指示語や接続語に着目する児童が増えた。「生きていける」「生きていけない」という言葉の間に「しかし」を提示することによって、双方を対比させて考えることができ、めだかの特別な仕組みを意識させることができた。

補助発問を提示する場合、子どもの思考がどのように流れているのかを正確にとらえることが大切になってくる。座席表を活用しながら子どもの表れをつぶさに記録し、次時にどのような補助発問をすればいいのかを考えることで、ねらいに迫る学習展開を組み立てることができた。

しかし、主発問を解決するための手助けとなる補助発問をたくさん用意することが「発問の工夫」とすると、主発問の妥当性も問題となってくる。主発問の在り方や焦点

を絞った補助発問の在り方についての課題が明らかになった。

(イ) 5年「考え方を見つけて読もう」

(詩「大漁」)

この単元では、進んで学ぶ子の姿を『浜と海の中』の様子を様々な角度から考えたり発表したりする』『鯛と人間』の立場の違いについての意見交換を通して、主題をとらえることができる」と押さえた。そして、進んで学ぶ子に迫るために『浜と海の中』のイメージをより広げさせる発問「主題に迫るために、対象を絞った『比べる』活動



(「発問の工夫」)を設定した。

(「発問の工夫」)を設定した。

主発問「大漁の主題は何だろう。主題について考えてみよう。」に迫る読み取りをさせるために、「浜と海の中」のイメージをより広げさせる必要があると考えた。そこで、まず見えるもの、聞こえる音、色等について考えさせる補助発問「どんなものが見えますか」「どんな色が浮かびますか」「どんな音が聞こえますか」等、視点を示した補助発問を提示した。

次に、「人間と鯛」に対象を絞って比べることで、それらが意味するものまで考えさせた。「食べる立場と食べられる立場」「強い者と弱い者」「生と死」等の対比は、人間と鯛に焦点を絞って考えることで出てくる事柄であると考えたからである。

「浜や海の中はどんな様子だろうか。比べてみよう。」という発問に対しては「にぎやか」「静か」といった一般的な発言しか見られなかったが、「見えるもの」「聞こえる音」「色」などを考えさせることによって「浜はお祭りのように賑やかだから、オレンジ色」「海の中は葬式のように暗く静かだから青っぽい」など、「どんな色に見えたのか」「どんな音が聞こえたのか」の根拠まで考えるようになった。

また、「人間と鯛」に対象を絞って比べる活動を行うことによって、「人間はたくさんの鯛を捕ることができてうれしいけれど、鯛はたくさんの仲間を失って悲しい」という考えが出てくるなど、全く対照的な二つの様子を読み取ることができた。そして、その二つを同時に見ている筆者の伝えたいこと(主題)「喜びの裏には悲しみがある」に気づくことができた。

視点や対象を絞ることによって、詩のような短い文章でも、一つの言葉から描かれている情景を思い描き、そこから様子や主題を解釈することができるようになった。

イ 主として手だて「場の工夫」に関する実践

(ア) 4年「中心をとらえながら読もう」(説明文「花を見つける手がかり」)

本単元では「必要な情報や知識を得るためには、説明文をどのようなことに注意して読み進めていけばよいか」を学ぶことが重要になると考え、「筆者の考え方の道筋に従って読み解く」ことを身に付けさせたい力と押さえた。

そこで、まず、学習形態を工夫することで、読み取ったり聴き取ったりする力を身に付けさせたいと考え、小グループによる話し合い活動を取り入れた。(場の工夫)主発問「確かめるためにどんな実験をしたかをまとめよう」に対して、小グループで意見交換を行い、考えを一つにまとめさせた。次に、グループの中の一人が他のグループに加わり、自分の意見と他の意見とを比べる活動を設定した。

他のグループに取材に行く子どもは、自分のグループの考えを伝えることはもちろん、他のグループの考えを自分のグループに持ち帰るという役割があるため、どの子もメモ

を取りながら意見をしっかりと聞くことができ、聴き取る力を高めていった。また、他のグループから聴き取った意見を自分のグループに持ち帰り、再度自分たちの意見を考え、「やっぱりこの言葉は必要だ。」とか「この部分はいらなかったね。」など考えを深めたり修正したりすることができた。

小グループでの話し合い活動や取材法を進めるにあたっては、必ず文章を読み取る力が必要となるので、説明文の要旨を意識して読むことができた。

(1) 1年「けんかした山」

単元目標「場面の様子を想像しながら読み、お話を読む楽しさを味わうことができる」に迫るために、本時の目標を「文中の『まげずに』『どっと』などの言葉や挿絵を手がかりにして山が噴火する場面を動作化する活動を通して、二つの山のけんかが激しくなった様子を読み取ることができる」とし、手だてとして挿絵や言葉からイメージした様子を動作化する活動を設定した。(場の工夫)

まず、「二つの山のけんかはどうなったのか。」という主発問を投げかけ、山の様子が分かる言葉や挿絵を押さえた。次に、子どもからあげられた山の様子が分かる言葉や挿絵を手がかりに「山になって噴火してみよう。」と投げかけ、二つの山の様子をイメージさせた。

主発問の問いかけに対しては「爆発している」「火を高く上げている」「噴火した」など、以前の山との違いに触れるような発言はなかったが、動作化を行い、さらに動作化を他の子どもが見る活動を行うことで、「そうじゃないよ。」「もっと、大きくジャンプした方がいいよ。」などという意見が出され、山の様子を詳しく読み取っていくことができた。

本文の言葉からイメージを膨らめ、読み取っていくことが理想であると考え、語彙が不足している1年生には、挿絵を手がかりにしたり動作化を行うことによって場面の想像を広げ、言葉のイメージを膨らめたりしていく活動は、内容を読み取らせる上で有効であった。



(2) 基礎・基本を身に付ける手立て

ア 「基礎・基本の時間」の設定

前学年と現在の学年の「言語学習」(ひらがな・カタカナ、漢字等)と「計算練習」の学習を計画的かつ継続的に行い、学習の基礎・基本となる力を育てた。実施時間と内容は、下記の通りである。

毎週月曜日と火曜日の朝8時15分～25分(学校裁量の時間)

月曜日 言語学習(漢字の読み書き、熟語の活用 接続詞等の使い方 など)

火曜日 計算練習(四則計算 数量関係についての基礎・基本の習熟と定着 など)

イ 「自彊チャレンジテスト」の実施

子どもの基礎的な国語と算数の力の定着状況を把握し、その後の指導に生かすことを目的に、実施している。実施方法等は、下記の通りである。

・実施方法 4月 レディネステスト(前学年の問題)
7月 第1回自彊チャレンジテスト(1学期の学習内容)

	12月 第2回自彊チャレンジテスト（2学期の学習内容）
	3月 第3回自彊チャレンジテスト（3学期の学習内容）
・留意点	問題は担任教師が作成する。 前回の結果と比較をする中で子どものつまずきの傾向をつかみ、対策を立てる。

ウ 話す・聴くのステップ表の活用

「話す力」「聴きとる力」の育成のための、発達の段階に応じた指導を全校で共通実践している。本年度は「自力で読む力」を取組の柱の中に位置付けているが、「読む力」を育成していくに当たって、「話す力」「聴く力」を全ての授業の中で「学習の基本」と押さえて指導している。また、「『聴く』ことと『話す』ことは表裏一体である」と考え、下記の内容でステップ表の活用を行った。



・ねらい	子どもの基本的な「話す力」「聴きとる力」の定着・向上を目指し、その目安となるステップ表を掲示する。発表や話し合い活動等の学習活動で意識的に取り組ませることによって「話す」「聴く」のスキルアップを図る。
・実施方法	ステップ表を教室前面に掲示するとともに、個人用の表を用意し、「できていること」「目標にしていること」を記入させることで意識化を図る。
※ステップ表は平成21年度末に改訂し、ステップの見直しや言葉の見直しをした。平成22年度は、9段階あったものを5段階に精選して取り組んだ。	

全校態勢で、ステップ表の活用に取り組んだことで、授業の中で友達の発表をじっくり聴き、それに対して自分の意見を筋道立ててはっきり話す子が増えた。また、学年の発達段階を意識しながら指導を行ったために、5・6年生の子どもたちの中には、自分で友達の意見に対してつなげて話せる学習スタイルも生み出されてきた。

今後も、継続して「話す・聴く」の指導を行うことで、「自力で読む力」の育成へとつなげていきたい。



(3) 読解力を活かした総合的な学習の時間

平成21年度末に作成した総合的な学習の時間の年間指導計画を基に、子どもの学習状況に応じて目標や学習計画の修正を行いながら、授業を実践してきた。その際、国語科で培った資料と関連させて文章を読み取る力や文章中の言葉を手がかりに根拠や解釈を述べる力を、総合的な学習の時間にも生かせるように意識して取り組んだ。さらに、国語で身に付けた基礎的な知識や技能を活用しながら、理解したことを表現する場を意図的に設定することにより、思考力・判断力・表現力を育てようと考えた。

4年 「すてきな吉田町」では、吉田町のすてきなところについて調べた後、自分たちが調べたことを紹介し合う場面を設けた。

ここでは、個人学習を基本とし、個の力を高めようと考えた。一人一人が「小山城趾」「能満寺のソテツ」「町立の図書館」「うなぎの養殖」「シラス漁」「レタス作り」など、吉田町が自慢できるものをテーマにして調べ、新聞形式にして、発表し合う場面を設けた。

さらに、その後の「もっとすてきなまちに」の単元では、「吉田町にB級グルメを作る」「小山城をイルミネーションで飾る」という計画を立てて吉田町の地場産品を生かしたB級グルメを考えたり、イルミネーションにかかる値段を調べ学習発表会の場で全校に発表したりした。



2 3年間の成果及び今後の課題

(1) 成果

ア サブテーマの修正を行いながら具体的な手立てを明確

にし、読解力の育成の視点で授業研究を進めた。それにより、子どもが根拠をもって事柄の順序を考えながら相手に分かりやすく述べたり、文や言葉にこだわりながら書かれている内容について事実と意見を捉えながら読み取ったり、相手の意見を考えながら聴き取ったりする力が身に付いてきた。また、単元を貫く課題を意識した発問の工夫をしたことで、子どもは文章から読み取れるイメージを広げ、文の主題に迫る深い読みができるようになってきた。

イ 研修初年度の平成20年度は、単元構想の工夫を柱にして、「進んで学ぶ子の育成」を目指したが、平成21年度に実践領域を「説明的な文章の解釈」の指導事項に絞り込んで研修した。その中で、「接続詞や副詞」「文末表現」などに着目して読み取りをさせたことで、子どもは、文中の言葉を意識した読み取りができるようになってきた。また、説明の順序を考えたり筆者の書き方の工夫を考えたりする発問は、説明的な文章の解釈のスキルを高めることにつながるようになった。

さらに、平成22年度は、「説明的な文章の解釈」に加え「文学的な文章の解釈」も研究実践した。研修内容を「発問の工夫」「場の工夫」として研修を深めたが、子どもが、考えたことや自分の意図が分かるような話し方をしたり感想と意見とを明確に区別しながら関わり合っ

て聴いたりするようになった。

ウ 国語科の読み取りの手法として「比較する」視点を持つことは、子どもの思考を活性化し、既習事項や生活経験等を根拠としながら自分の考えを創造する力を高めるということを明らかにした。

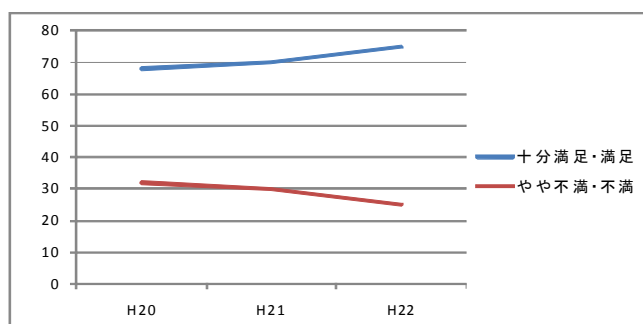
エ 6年生を対象として、全国学力学習状況調査を3年間継続実施したが、国語科においては「主として知識に関する問題」の「書く能力」「読む能力」「知識・理解・技能」の問題で、研修の成果が見られた。特に、「書く能力」では、全国平均を3.5ポイント上回った。また、「主として活用に関する問題」では、「話す・聞く」で、全国平均を1.5ポイント上回った。これは、ステップ表を活用しながら読解力の育成を図る授業を行ってきたことや「場の工夫」の中に、互いに聴き合うことや話し合うことを取り入れ「話す力」「聴きとる力」の育成を図ってきたことの成果である。

オ 国語や算数の基礎学力の定着をねらった「基礎の時間」「チャレンジテスト」などを教育活動に位置付けたことは、子どもの「基礎的・基本的な知識・理解」の定着につながった。

平成21年度と平成22年度の5年生に同じ問題で4月に行った「自彊チャレンジテスト」の漢字テストの結果を比べると、平成21年度の平均点は58.2点、平成22年度の平均点は66.4点と、漢字を書く力や読む力の向上が見られた。

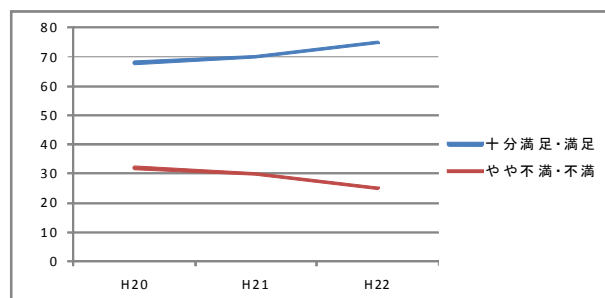
カ 保護者へ「子どもは学習内容がよく分かっていますか？」との質問をした。その結果は下記の通りである。

	十分満足	満足	やや不満	不満
H20	10	58	28	4
H21	9	63	25	3
H22	17	58	24	1



また、全校児童に対する質問として、「基礎の時間やチャレンジテストに一生懸命取り組んでいますか」と問い掛けた。

	十分できた	できた	あまりできない	全くできない
H21	31	50	15	4
H22	35	48	14	3



これらの結果から、保護者の方たちも子どもの学力が徐々に向上してきていることを感じており、子どもたちの意欲も向上してきたことが窺える。

(2) 課題

ア 子どもの読解力を高めるためには、子どもの学習過程を明確にしながら、「発問の工夫」を行う必要がある。特に、新学習指導要領で示されている「読むこと」の学習過程の中で「説明的な及び文学的文章の解釈」の段階で学んだことを、「自分の考えの形成及び交流」の段階へとつなげていけるような発問のあり方を研究する。さらに、読解力の更なる高まりを意識し、各単元で積極的に言語活動を取り入れていく。

イ 教師の意図と子どもの思考の流れを一致させるために、国語科における子どもの実態把握を適切に行い、学習展開の工夫をしていく。

ウ 来年度からの新学習指導要領完全実施に向けて、本校が子どもたちに育成してきた「話を聴き取る力」「自力で文章を読む力」を生かし、「言語活動の充実」を研修の視点にして進める。

エ 総合的な学習の時間については、国語科を窓口として取り組んだ研究成果を生かす取組をする。特に、自校で設定した「国際理解」「福祉」などの「横断的・総合的な学習」について、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の探求的な学習を大切にしながら、子どもの読解力の向上を目指す。